第１章　富士吉田市の概要

第１節　自然的・地理的環境

（１）富士吉田市の位置・面積

本市は山梨県の南東部、富士山の北麓に位置し、東京都心から約 100km 圏にあります。本市は、広域拠点として１市２町３村からなる富士北麓地域の中心的な役割を担っています。北は都留市・西桂町、東は忍野村・山中湖村、西は富士河口湖町・鳴沢村、南は静岡県小山町に接しており、面積 121.74 ㎢、東西に約 11km、南北に約 23km の広がりをもち、標高 650～900ｍの緩勾配地に市街地が展開しています。本市の周辺には富士山と道志・御坂両山地があり、これらの間を桂川が流れ、市内の山岳と森林の大部分が富士箱根伊豆国立公園区域に含まれています。こうした良好な自然環境から、本市は国際会議観光都市に指定されています。

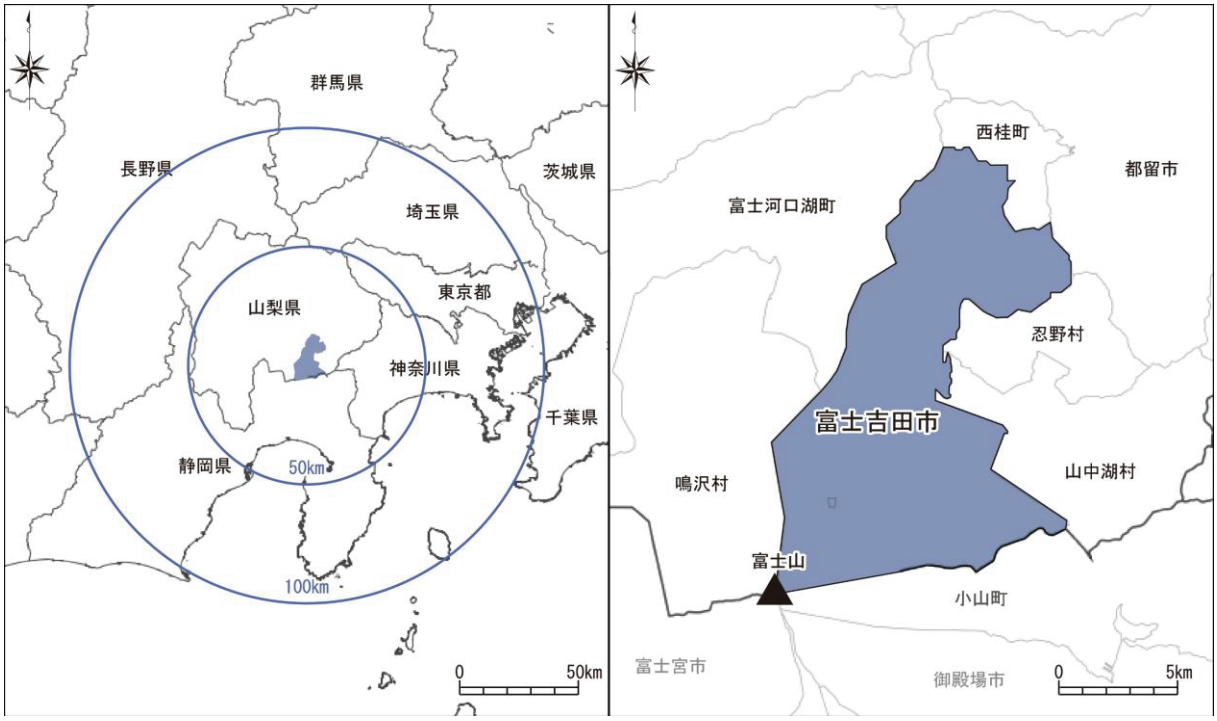


図1･1　富士吉田市の位置

（２）水系

市内を流れる主な河川は桂川（相模川）と宮川（みやがわ）です。市内を貫流している桂川は山中湖の湖水及び忍野八海の湧水を水源としています。桂川は小明見で小佐野川（おさのがわ）を合わせて東流し、相模川となって相模湾にそそいでいます。

宮川は下吉田の中央を通り、下流の下ノ水地区で桂川に合流します。

富士山が生み出す豊富で良質な地下水は、古くから山麓の人々の生活用水、農業用水として利用されており、近年では、繊維、電子機器などの工業の発達にも役割を果たしています。宮川の下流域では鱒の養殖にも利用されています。

市内に流れている一級河川：桂川（相模川）／欄干川／中野川／殿入川／小佐野川／大沢川／長泥川／宮川／中沢川／入山川／間堀川／嘯川／第二嘯川／神田堀川

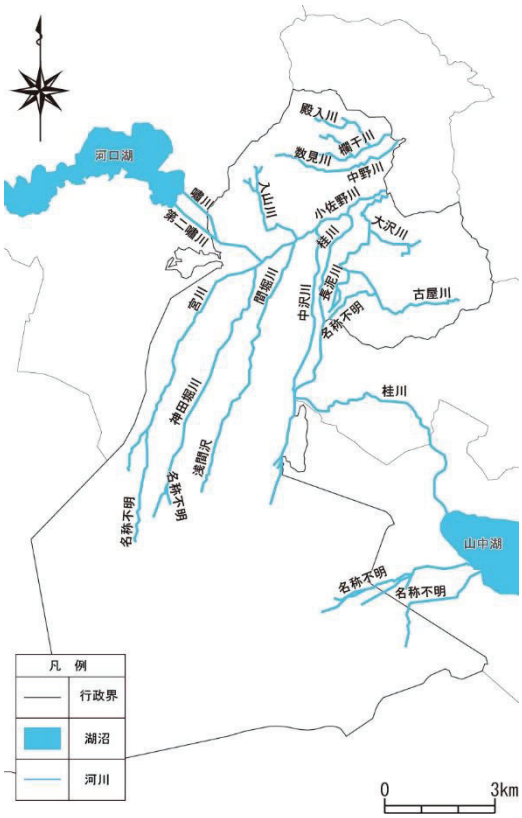


図1･2　河川位置図（資料:国土数値情報）

（３）地形と地質

本市の南には富士山がそびえており、また、本市の北には、杓子山（しゃくしやま）や霜山（しもやま）などの 1,000～1,500ｍ級の山があります。本市はこれらの山々に囲まれた場所に位置しています。台地の形成史として、まず本市北側に概ね東西方向に発達する杓子山などが誕生しました。杓子山を基盤とする台地に向かって、本市南側から富士山の活動による溶岩や砕屑物等の流入があって、現在の姿となりました。この事情により、本市は我が国の中でも相対的に高標高に位置することとなり、豊かな自然環境と優れた自然的な景観を有しています。

本市のほとんどは富士火山地、富士火山山麓地に含まれ、地形区分は、火山地・山地・低地の３つに区分できます。

その他本市に特徴的な地形には、崩壊地形・溶岩流・砂質裸地があります。

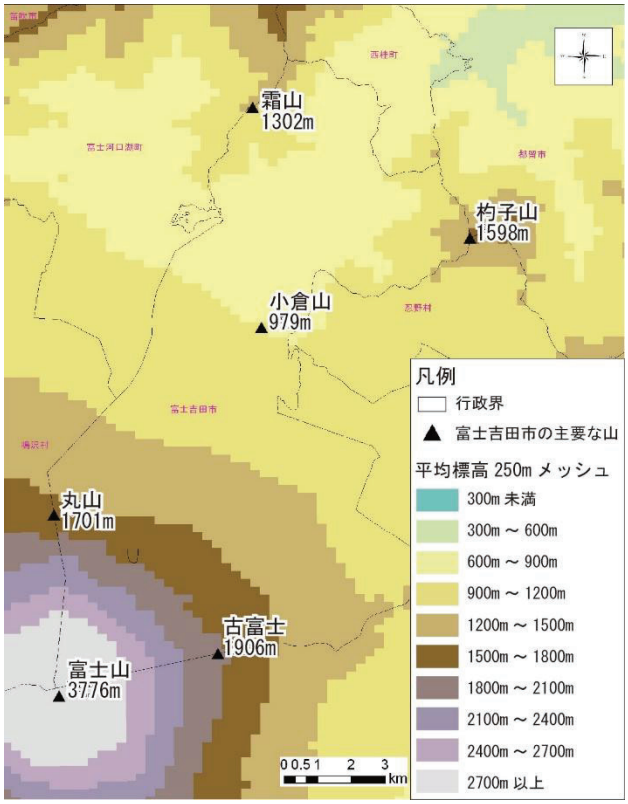
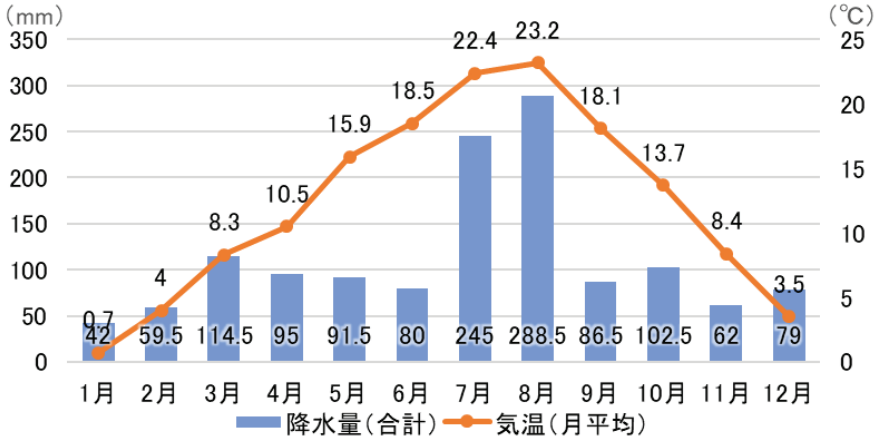


図1･3　標高図(資料:国土数値情報)

（４）気候

本市は高原に位置するため気候は比較的寒冷であり、2021（令和３）年の平均気温は 12.3℃です。そのため、本市は避暑地・観光地として人気を集めています。一年で最も暖かい月は８月で、平均気温は 23.2℃です。

2021（令和３）年の年間の降雨量は 1,376㎜ であり、最も乾燥している時期は１月で降水量は平均 42㎜ です。降水量のピークは８月であり、平均 288.5㎜ です。



（資料：統計　ふじよしだ　令和4年度版）

図1･4　2021（令和3）年　富士吉田市の平均気温と降水量

（５）植生

本市の標高値は、低い場所で上暮地（かみくれち）の 650ｍから富士山頂の 3,744ｍまでと 3,000ｍ以上の差があります。気候帯は温帯から寒帯に含まれ、変化に富んだ植生分布と多種多様な植物を有している点が本市の植生の特徴です。上暮地には、コナラ、ケヤキ、ミズキ、シデ類、カエデ類、アカマツ等が主に生育しています。下吉田（しもよしだ）、明見（あすみ）、上吉田（かみよしだ）には、ケヤキ、エゾエノキ、イヌシデ、コブシ、コナラ、キハダ、ミズキ、イタヤカエデ等が生育しています。上暮地や明見、下吉田の山林には、アカマツやスギの植林が多いです。富士スバルライン沿道のアカマツ原生林と諏訪の森アカマツ林は全国に例を見ない貴重な森林です。

吉田口登山道の標高 1,500ｍ付近にはウラジロモミの天然林が、標高約 1,600ｍ付近は亜高山性のコメツガの天然林がみられます。五合目付近はシラビソが優占しカラマツが多くなる天然林であり、垂直分布により五合目上からダケカンバ林に移り変わります。５月上旬から６月上旬には、レンゲツツジとフジザクラの花が見られます。

図1･5　アカマツ林

図1･6　フジザクラの群落

第２節　社会的状況

（１）富士吉田市の成り立ち

本市は、1951（昭和 26）年に下吉田町・富士上吉田町・明見町が合併して誕生しました（当時の人口は約 36,500 人）。その後 1960（昭和 35）年に西桂町上暮地地区を編入して、現在に至っています。

表1･1　富士吉田市の行政区域の変遷

年代	行政区域の変遷
1878（明治 11）年	郡区町村編制法の施行により南都留郡の所属となる。
1939（昭和 14）年	瑞穂村が町制施行・改称して下吉田町となる。
1947（昭和 22）年	福地村が町制施行・改称して富士上吉田町となる。
1951（昭和 26）年	明見村が町制施行して明見町となる。
1951（昭和 26）年	下吉田町・明見町・富士上吉田町が合併して富士吉田市が発足（県内で２番目、郡内地方で最初の市）。
1960（昭和 35）年	西桂町の一部（大字上暮地の大部分と大字下暮地・小沼のごく一部）を編入。現在に至る。

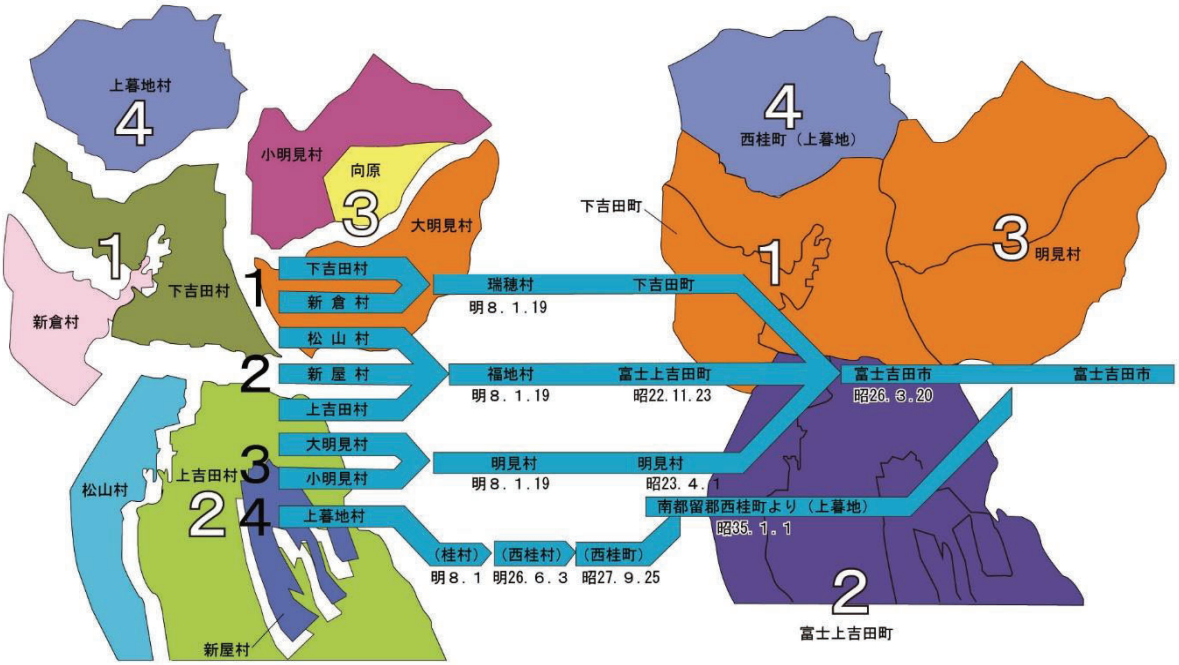


図1･7　富士吉田市の行政区域の変遷

（２）地区別の概要と歴史

本市では、行政区域の変遷により、上暮地、大明見（おおあすみ）、小明見（こあすみ）（尚原（むかいばら））、上吉田、下吉田、松山（まつやま）、新屋（あらや）、新倉（あらくら）の８つの地区に分かれ、それぞれ独自で特徴的な歴史文化を確認することができます（図１・７）。この８つの地区と小明見地区の一部である向原地区を含めた９つの地区ごとに歴史文化を整理しています。ここでは、この９つの地区の概要を記述します。

１）上暮地地区

上暮地地区は、本市の北部、桂川の左岸に位置し、西は三ッ峠山より南に延びる尾根が連なっています。桂川を挟んで北、北東は西桂町、南西は下吉田地区に接しています。

上暮地地区では、近代以前から織物業が盛んであり、近代になると豊富な水量と落差のある地形を利用し、水力を用いた機織が行われました。

なお、上暮地地区には、産土神の浅間神社のほか、神明社、日月神社、山神社があります。

２）大明見地区

大明見地区は本市の北東部、北流する桂川とその支流の長泥川に挟まれた溶岩台地上に位置します。東から北東にかけて小明見・向原地区と、北東から西にかけては下吉田地区と、南西は上吉田地区と接しています。

現在の集落は南東部から現在の地へ近世に移転されたものであり、南北を通る大通りの両側に沿って規則正しく屋敷割された当時の様子を現在でも見ることができる場所です。

なお、大明見地区には産土神の北東本宮小室浅間神社のほか、寺院として臨済宗妙心寺派慈光院があります。

３）小明見地区

小明見地区は、本市の北東に位置し、北を大明見地区、南を上暮地地区、西を下吉田地区と接し、北流する小佐野川と桂川の間に挟まれた溶岩台地上にあります。

小明見地区の集落は、近世に向原地区の集落が移転して形成されたもので、富士山に向かう富士道と大明見地区を経由して鎌倉街道に繋がるところであったことから、脇往還の宿場であったとされる場所です。

なお、小明見地区の代表的な寺院として浄土宗の引接山西方寺があります。

４）向原地区

向原地区は、小明見地区の一部であり、北を大明見地区、東を小明見地区、東から南東を杓子山の支尾根に挟まれて北西流する大沢川沿いの地域にあります。

向原地区は、小明見地区の始まりとされる場所であるとともに、市指定無形民俗文化財である道祖神祭などの独自の文化を現在においても残している地区であるため、本計画では小明見地区から分けて整理しました。古くより「半農半機」と言われるように水稲や畑作のほか、養蚕が盛んに行われ、代表的な寺院として浄土宗の三寶山万年寺があります。

５）上吉田地区

上吉田地区は本市の南西部に位置し、北東から北にかけては下吉田地区、北西は松山地区、西は溶岩台地剣丸尾上で富士河口湖町船津地区、鳴沢村に隣接しています。また、富士登山の登山道の入口にあたり、国道 137 号（富士道）と県道 701 号線（吉田口登山道）が縦断し、鎌倉街道と交差する場所でもあります。

富士山信仰の隆盛した当時の門前集落として、御師の宿坊が建ち並んでいた様子を残すととも

に、江戸時代に作られた建造物などの多くの文化財が集中する場所です。

元々は、現在地よりも東側の場所に集落が形成されていましたが、春先・初冬の急激な気温上昇により発生する雪代と呼ばれる土砂災害の影響により、1572（元亀３）年に現在地に移転した歴史を持ちます。

なお、上吉田地区の産土神の北口本宮冨士浅間神社のほか、代表的な寺院として時宗の吉積山西念寺があります。

６）下吉田地区

下吉田地区は本市の中央部、桂川上流の左岸に位置し、広い緩傾斜地であり、北は上吉田地区、東から南東にかけては桂川を境に小明見地区、大明見地区、南西は松山地区に接しています。西から宮川と間堀川が流れ、地区内で合流するほか、湧水を水源とする小河川が多く、地区の中央には国道 139 号（富士道）が通じています。

近現代には、織機の自動化などにより隆盛した織物産業の重要拠点として栄えた場所です。

なお、下吉田地区には、産土神の富士山下宮小室浅間神社や代表的な寺院として臨済宗妙心寺派の水上山月江寺があります。

７）松山地区

松山地区は、本市の南西部に位置し、北東から南は上吉田地区、北西から北東は下吉田地区、西は富士河口湖町船津と接しています。地区の中央を神田堀川が北流し、上吉田地区から西に向かう国道 137 号（鎌倉街道）が集落の北側を通ります。上吉田地区に隣接していることから、古くから御師町との交流を持ち、松山宿が建てられたとの記録があるなど、歴史のある場所です。なお、松山地区の産土神の松尾神社があります。

８）新屋地区

新屋地区は本市の南部、標高 900ｍの旧鎌倉往還沿い立地しており、南を富士山の裾野と接しています。南東には小倉山、北には城山があり、南には桂川から分水した福地用水が西流しています。また、新倉地区の北西から南東にかけて国道 413 号が通じています。

戦国時代には地区内にある小倉山、城山は、北条氏や今川氏、武田氏によって争奪が繰り返された場所でした。

なお、新屋地区には産土神の正一位蓮神社や山神社があります。

９）新倉地区

新倉地区は本市の中西部、北に三つ峠山から南に延びる尾根の尾垂山・嘯山などの東麓に位置し、西は山を境に富士河口湖町、東は下吉田地区に接します。

新倉地区は溶岩台地上にあり、水が乏しかったため、近世に用水暗渠工事が行われました。水に苦心し、長い年月をかけ、開発を行った歴史がある場所です。

なお、新倉地区には産土神である新倉富士浅間神社のほか、浄土真宗本願寺派の正福寺、大正寺、如来寺の「新倉三ヶ寺」と呼ばれる寺院があります。

（３）人口動態

１）現況

本市の人口は年々減少傾向にあり、2024（令和６）年８月末では、46,477人となりました。これは、ピーク時である1989（平成元）年の55,999人に比べ17%減少したことになります。毎年、転出数が転入数より 200～300 人ほど多く、2005（平成17）年以降、死亡数が出生数を上回っています。

一方、世帯数は、核家族化の進行や単身高齢者世帯などの増加により、人口の減少にもかかわらず依然増加傾向にあります。

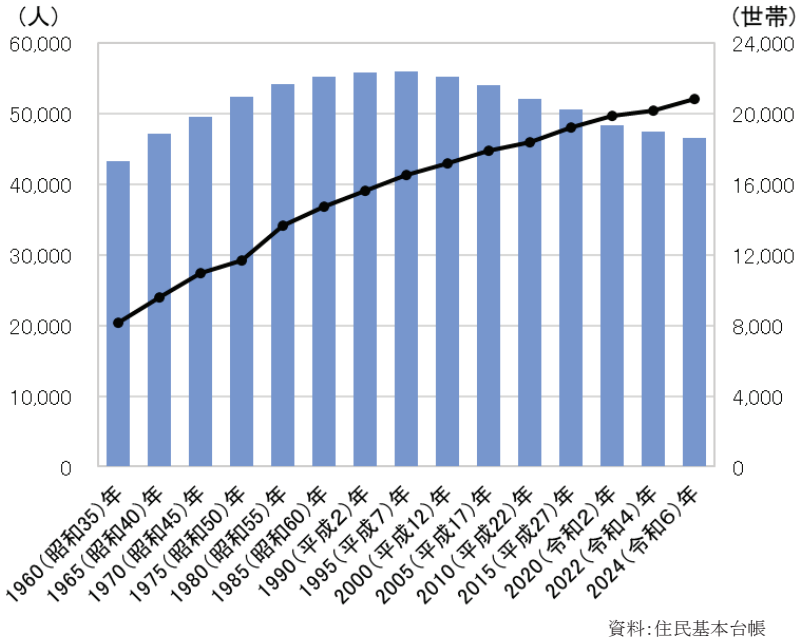


図1・8　富士吉田市の総人口・世帯数の推移

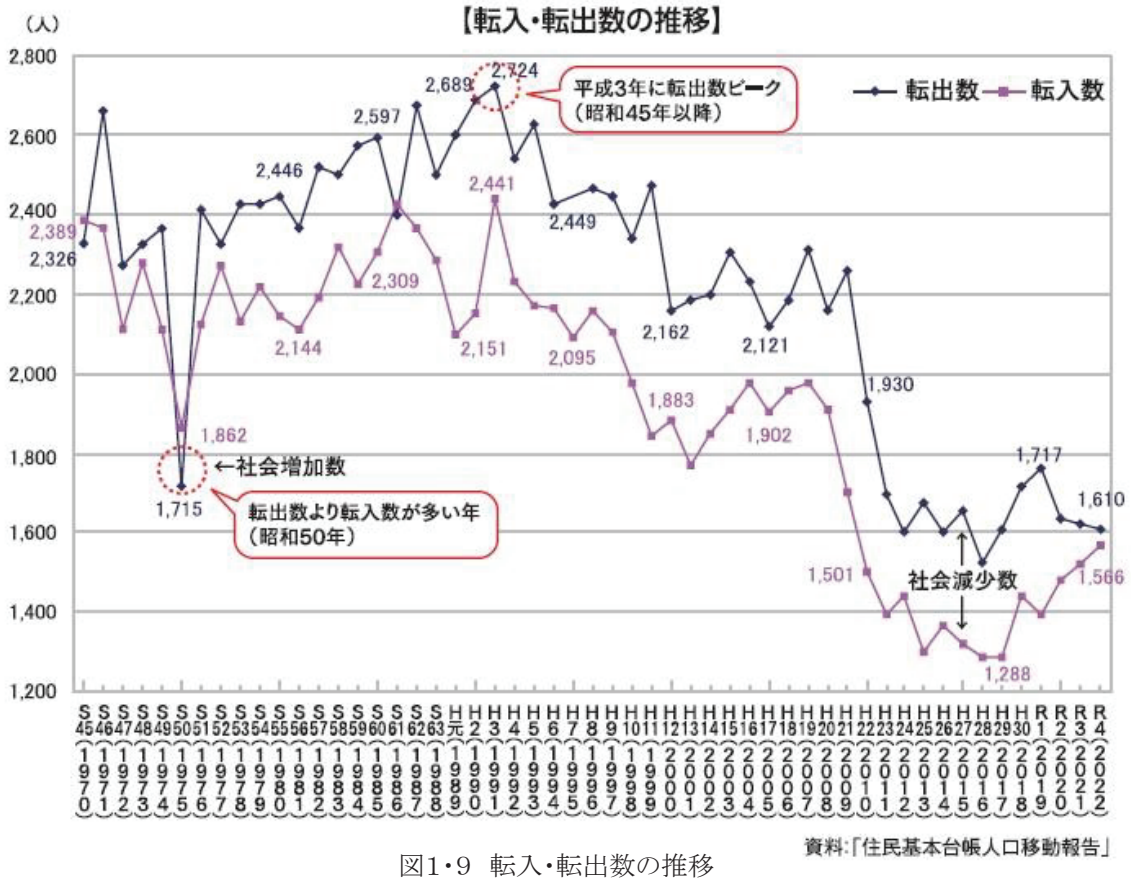


図1・9　転入・転出数の推移

（富士吉田市デジタル田園都市構想人口ビジョン・第3期地域創生総合戦略）

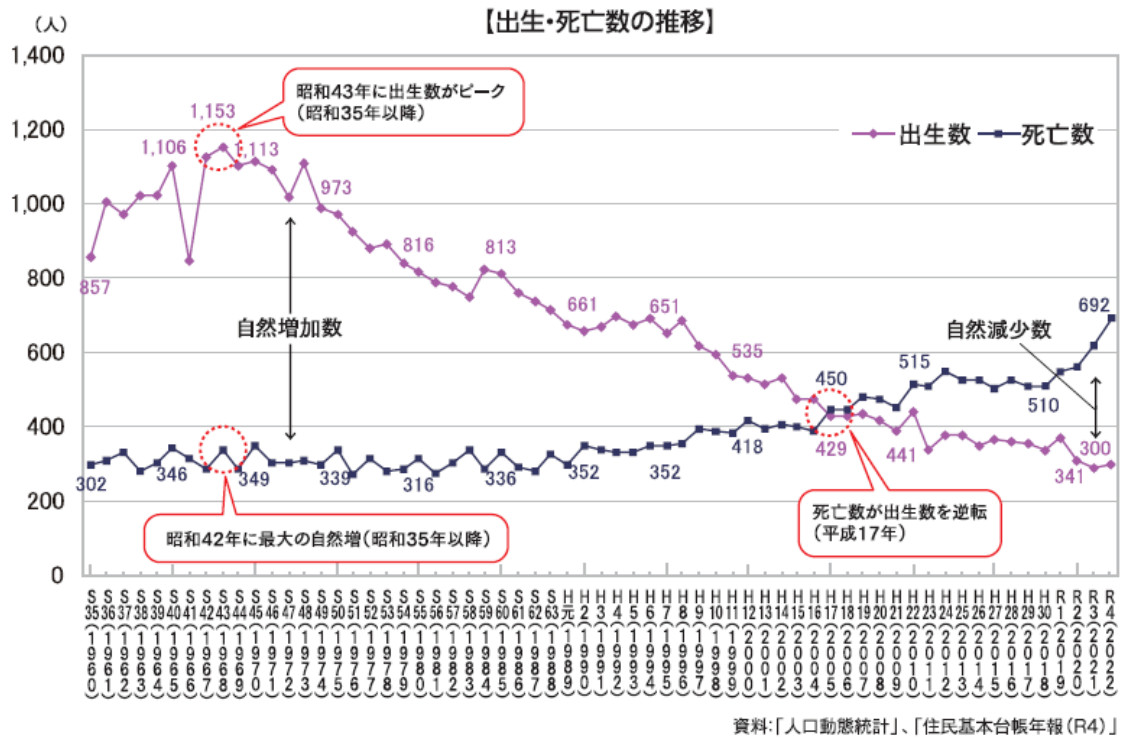


図1・10　出生・死亡数の推移

（富士吉田市デジタル田園都市構想人口ビジョン・第3期地域創生総合戦略）

少子高齢化の進行により、65 歳以上の老年人口の割合は 2020（令和２）年で全国平均を上回る 30%に達しています。高齢者人口割合の増加により、2020（令和２）年時点で生産年齢人口（15～64 歳）の 1.87 人で 65 歳以上の高齢者一人を支える構造になっています。

また、2024（令和６）年に人口戦略会議が発表した人口の将来推計では、2050（令和 32）年における本市の人口は 35,292 人です。さらに 20～39 歳までの女性人口の将来推計は 2,994 人であり、2020（令和２）年に比べ 43.7%減少すると予想されました。

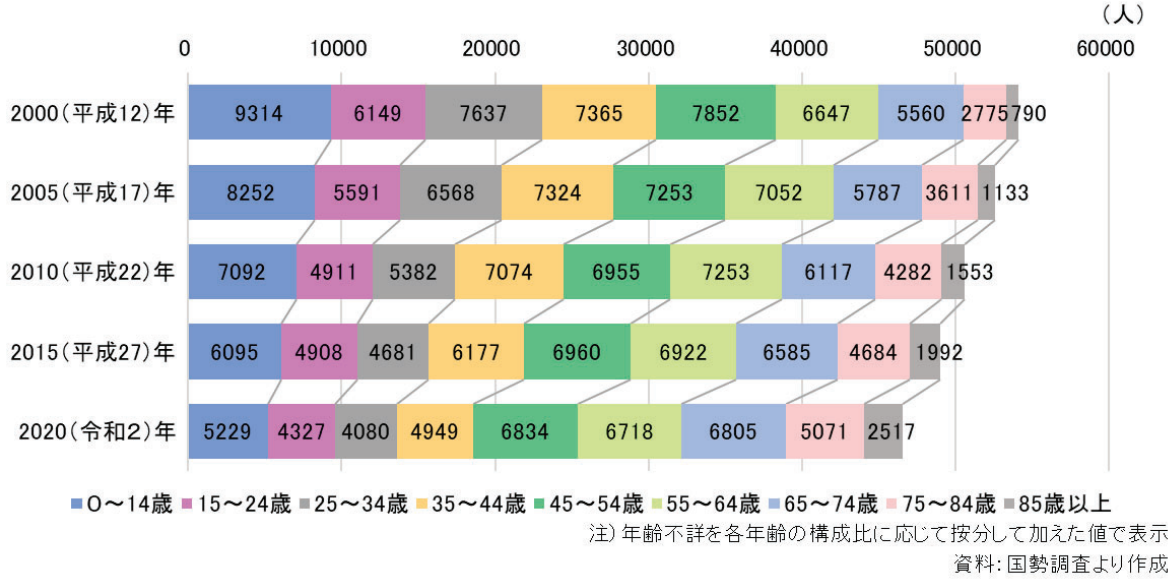


図1・11 年齢 10 歳階級別富士吉田市人口の推移

（４）交通機関

広域交通網としては、自動車専用道路の中央自動車道富士吉田線及び東富士五湖道路が通るほか、甲府方面とは国道137号、静岡県御殿場方面とは国道138号、大月・都留方面及び静岡県富士宮・富士方面とは国道139号の計５路線６ルートが通っており、広域的な交通の要衝の位置を占めています。鉄道は富士急行線が河口湖方面とJR中央線大月駅方面を結んでおり、東京方面との通勤・通学・観光交流を支えています。

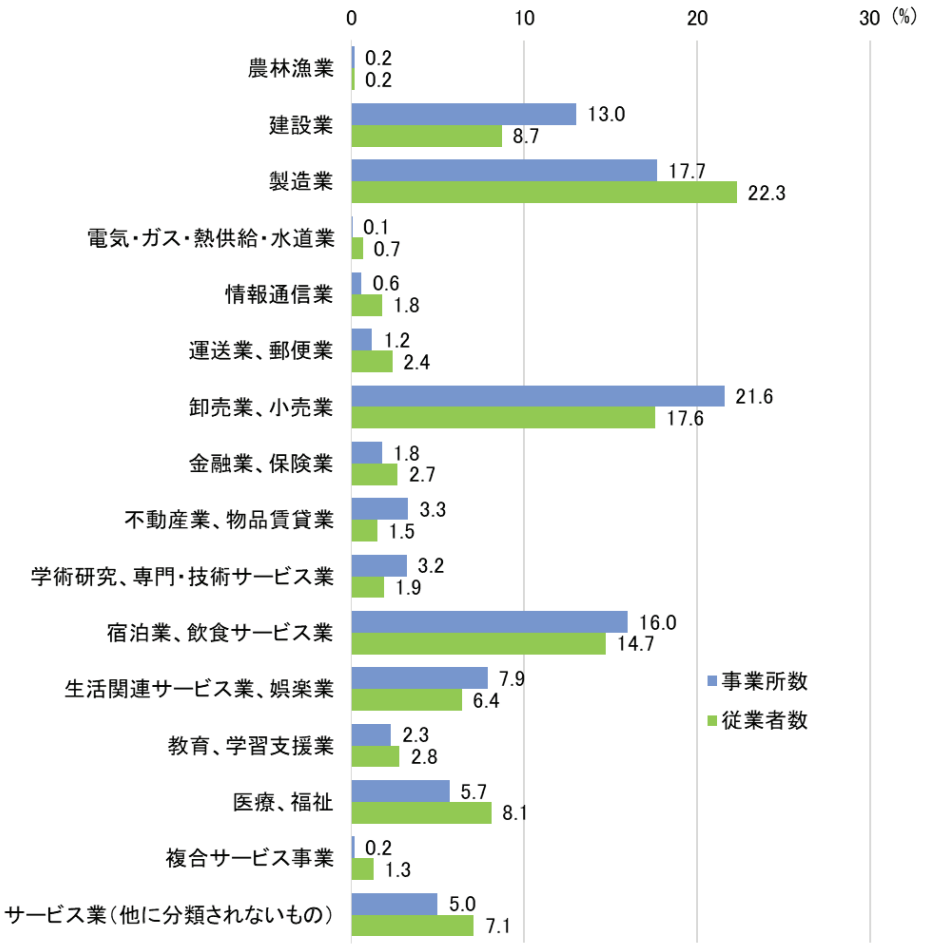
図1･12　公共交通網図

また、東富士五湖道路富士吉田忍野スマートインターチェンジが、2022（令和４）年７月24日に開通しました。これにより、世界文化遺産の構成資産である北口本宮冨士浅間神社や吉田口登山道、ふじさんミュージアムなどへのアクセスが向上しました。観光客がより長く市内に滞在し、より多くの観光名所を訪れることが期待されます。公共バスは富士急行により運行されています。市内と全国各地を結ぶ高速バス、市内と主要都市を結ぶ路線バス、観光施設を巡る周遊バス、登山客を運ぶハイキングバス、市街地を走るコミュニティバス（タウンスニーカー）があります。

（５）産業

１）概要

本市の産業構造の特徴は、「製造業」、「卸売・小売業」、「宿泊・飲食サービス業」、「建設業」の割合が高いことです。この４つの業種が従業者数の６割を占め、本市の基盤産業であるといえます。特に「卸売・小売業」、「宿泊・飲食サービス業」が盛んである点は、本市の観光地的様相を示しています。一方で、農林漁業は事業所数、従業者数ともに割合が少なく小規模です。本市は高冷地であり、土壌は火山灰土であることから農業に不向きな土地条件であり、古くは雑穀や富士山からの流水を利用した麦作などが行われました。現在も農業の規模は小さく、農家数及び農業就業人口の大半が第二種兼業農家です。



資料：2016（平成 28）年経済センサス活動調査

図1･13　事業所数･従業者数の産業大分類別構成比

２）製造業

製造品出荷額の規模でみると、「飲料・たばこ・飼料」が５割近くであり、「電子部品・デバイス・電子回路製造業」、「繊維」がこれに続きます。これら３つの業種が製造品出荷額の８割以上を占めています。本市は古くから織物の名産地として知られてきました。現在も繊維業は本市の製造業にとって欠かせない存在です。

（６）観光

１）市の観光の概要

本市は世界文化遺産である富士山の自然や歴史、文化など豊富な観光資源に恵まれています。山梨県内を訪れる観光入込客数（実人数）のうち本市への観光客が占める割合は 15%であり、県内有数の観光都市です。本市には富士河口湖町にまたがる大型の観光レクリエーション施設に加え、富士山信仰の歴史を示す北口本宮冨士浅間神社や旧外川家住宅、ふじさんミュージアムや富士山レーダードーム館、2023（令和５）年にオープンした富士の杜・巡礼の郷公園等の文化施設が充実しています。また近年は富士山の「ビュースポット」を求め、新倉山浅間公園や諏訪の森自然公園などを訪れる観光客が増えています。

表1･2　市内の主な文化施設

名称	所在地	管理運営
北口本宮冨士浅間神社	上吉田 5558	北口本宮冨士浅間神社
旧外川家住宅	上吉田 3-14-8	富士吉田市
小佐野家住宅（御師住宅）	上吉田 7 丁目 11-1	個人
ふじさんミュージアム	上吉田東 7 丁目 27-1	富士吉田市
富士の杜・巡礼の郷公園	上吉田東 7 丁目 27-1	富士吉田市
富士山レーダードーム館	新屋 1936-1	一般財団法人 ふじよしだ観光振興サービス
恩賜林庭園	上吉田 5605	富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合
諏訪の森自然公園	上吉田 5329-2	富士吉田市
富士吉田市立図書館	緑ヶ丘 2 丁目 5-23	富士吉田市
富士五湖文化センター	緑ヶ丘 2 丁目 5-23	一般財団法人 富士吉田文化振興協会
フジヤマミュージアム	新西原 2 丁目 6-1	公益財団法人堀内浩庵会・富士急行株式会社
新倉山浅間公園	浅間 2 丁目 4-1	富士吉田市
白糸の滝	上暮地	
明見湖公園	小明見 5 丁目 4-15	富士吉田市

近年では繊維産業をテーマとしたイベント「ハタオリマチフェスティバル」が盛り上がりを見せています。しかし、カスタマーアンケート調査では「世界文化遺産の富士山の構成文化財をめぐる」ことを目的に訪れている人は全体の 13.0%です。また 57.1%が「世界文化遺産富士山（信仰の対象と芸術の源泉、富士講、御師文化）」を「知らない」と回答し、84.7%が繊維産業を活用したイベントを「知らない」と回答しています。

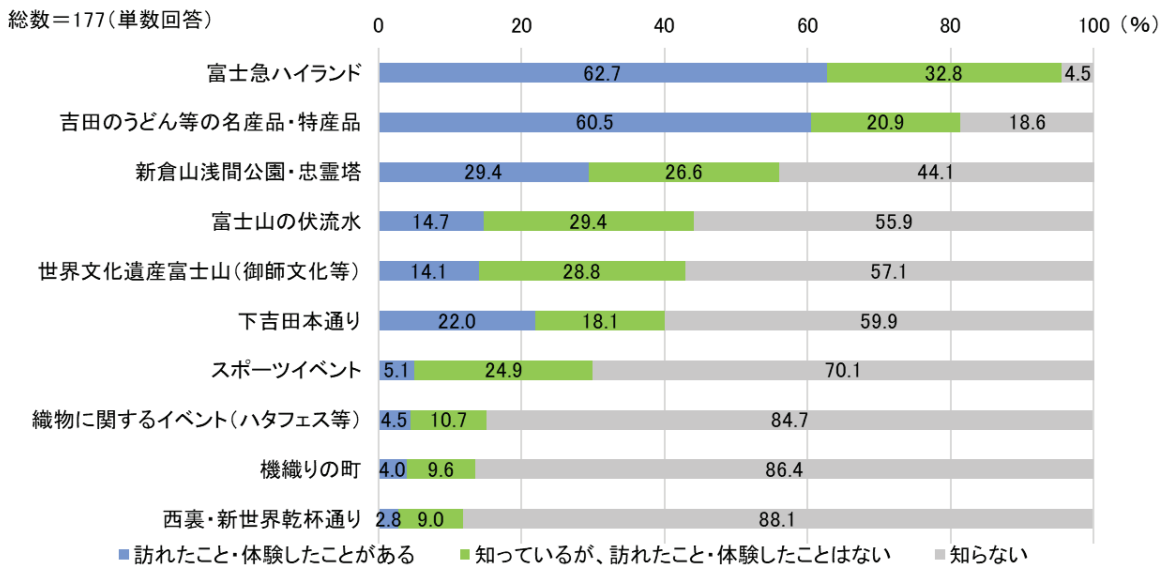


図1・14　観光資源・スポットの認知度（資料：富士吉田市観光推進計画）

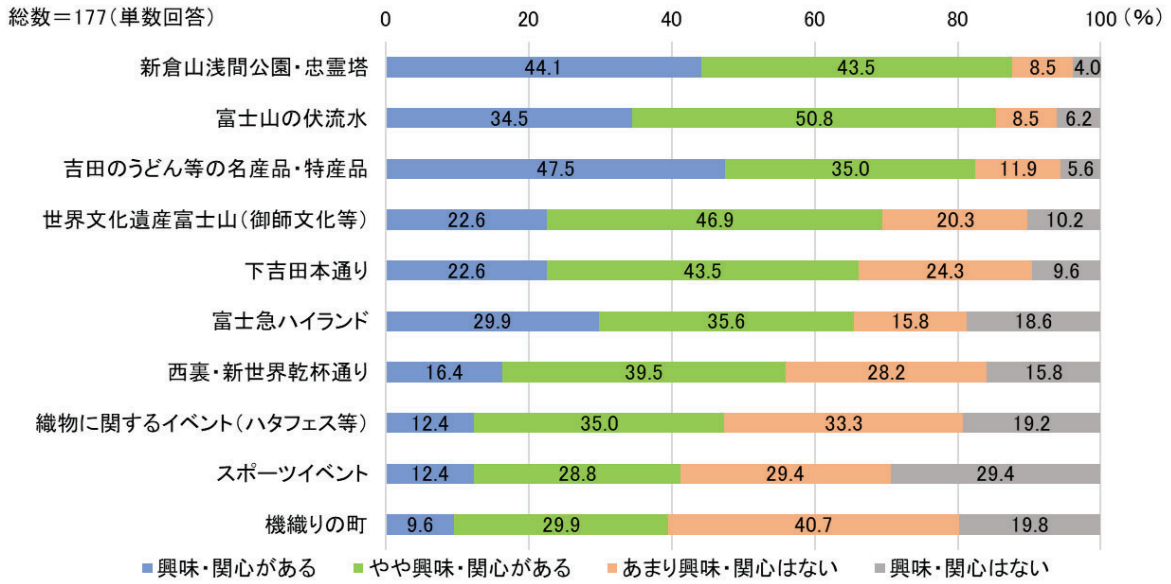


図1・15　観光資源・スポットへの興味・関心（資料：富士吉田市観光推進計画）

２）山梨県の観光動向

2022（令和４）年の山梨県における観光入込客数（実人数）は2,738万人です。新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、2017（平成29）年の観光入客数（4,814万人）と比較すると減少しています。しかし、世界遺産富士山の継続的な人気や、外国人観光客の増加などにより、前年比は149%と観光入客数は着実に回復傾向にあります。そのうち、訪日外国人客は17万人であり、観光消費額は、3,066億円です。

表1・3　令和4年観光入込客統計調査の概要（資料：令和4年　山梨県観光入込客数統計調査）

ア）観光入込客	オ）目的別観光入込客（延べ人数）
①観光客実人数27,384千人（前年比149.0%） ②観光客延人数31,328千人（前年比130.2%） ③平均訪問観光地点数 1.1地点（前年1.3地点）	①自然　1,900 千人（前年比154.2%） ②歴史・文化　6,903 千人（前年比130.8%） ③温泉・健康　3,876 千人（前年比114.4%） ④スポ・レク　7,321 千人（前年比128.7%） ⑤都市型観光　2,455 千人（前年比120.0%） ⑥行祭事・イベント 1,134 千人（前年比205.8%） ⑦その他　7,739 千人（前年比131.7%）
イ）日帰り・宿泊別観光入込客	
①日帰り客実人数 19,246千人（前年比145.0%） ②宿泊客実人数8,138千人（前年比159.3%）	
ウ）居住地別観光入込客	**カ）季節別観光入込客**
①県外客実人数22,329千人（前年比166.7%） ②県内客実人数 5,055千人（前年比101.4%）	①春（3～5 月）6,296 千人（前年比144.9%） ②夏（6～8 月）7,828 千人（前年比173.1%） ③秋（9～11 月）8,569 千人（前年比140.9%） ④冬（1～2 月、12 月） 4,692 千人（前年比136.9%）
エ）訪日外国人客	**キ）観光消費額**
①延べ宿泊客数 167 千人（前年比 668.0%） ※本項目は観光庁宿泊旅行統計調査（確定値）の数字を比較。	①観光消費額　3,066 億円（前年比114.0%） ②一人当たり平均消費額 11,196 円（前年比 76.5%）

３）富士吉田市の観光動向

2022（令和４）年の観光入込客数（延人数）を市町村別にまとめると表1・4の通りです。富士吉田市が397万人（前年比151.4%）と最も多く、次いで甲府市が392万人（同154.7%）、北杜市272万人（同131.8%）などとなっています。構成比では富士吉田市が14.5%を占めています。

表1・4　市町村別観光入込客数（延人数）（単位：人、%）

項目	令和４年		令和３年		平成 29 年		平成 28 年		平成 23 年		対前年比	対 23 年比
	入込客数	構成比	入込客数	構成比	入込客数	構成比	入込客数	構成比	入込客数	構成比		
甲府市	3,924,593	14.33%	2,536,066	13.80%	4,877069	10.1%	4,820,716	10.1%	4,136,181	10.1%	154.7%	94.8%
富士吉田市	3,966,186	14.48%	2,618,028	14.25%	7,660,988	15.9%	7,388,545	15.5%	5,869,924	14.4%	151.4%	67.5%
都留市	977,970	3.57%	746,539	4.06%	1,363,008	2.8%	660,120	1.4%	488,124	1.2%	131.0%	200.3%
山梨市	1,442,176	5.27%	1,138,055	6.19%	1,909,940	4.0%	2,014,365	4.2%	2,060,849	5.0%	126.7%	69.9%
大月市	154,613	0.56%	118,300	0.64%	323,751	0.7%	341,122	0.7%	335,334	0.8%	130.6%	46.1%
韮崎市	291,282	1.06%	227,398	1.24%	567,185	1.2%	633,497	1.3%	358,210	0.9%	128.0%	81.3%
南ｱﾙﾌﾟｽ市	440,393	1.61%	289,624	1.58%	691,890	1.4%	752,880	1.6%	668,990	1.6%	152.0%	65.8%
北杜市	2,726,523	9.96%	2,087,408	11.36%	6,005,344	12.5%	6,038,924	12.7%	5,790,070	14.2%	131.8%	47.0%
甲斐市	421,827	6.12%	391,865	2.13%	693,704	1.4%	771,880	1.6%	886,087	2.2%	107.6%	47.6%
笛吹市	1,953,183	7.13%	1,383,569	7.53%	3,114,464	6.5%	3,157,115	6.6%	3,043,135	7.5%	141.1%	64.1%
道志村	673,315	2.46%	551,191	3.00%	930,108	1.9%	946,003	2.0%	793,200	1.9%	122.1%	84.8%
西桂町	47,531	0.17%	39,817	0.22%	73,144	0.2%	75,132	0.2%			119.3%	

項目	令和４年		令和３年		平成 29 年		平成 28 年		平成 23 年		対前年比	対 23 年比
	入込客数	構成比	入込客数	構成比	入込客数	構成比	入込客数	構成比	入込客数	構成比		
忍野村	197, 395	0. 72%	118, 163	0. 64%	277, 853	0. 6%	300, 448	0. 6%	155, 919	0. 4%	167. 0%	126. 6%
山中湖村	650, 235	2. 37%	385478	2. 10%	1, 094, 449	2. 3%	1, 107, 413	2. 3%	1, 099, 015	2. 7%	168. 6%	59. 1%
鳴沢村	1, 218, 127	4. 45%	887391	4. 83%	3, 861, 364	8. 0%	3, 971, 255	8. 3%	2, 923, 614	7. 2%	137. 2%	41. 6%
富士河口湖町	2, 488, 284	9. 09%	1114366	6. 06%	6, 828, 617	14. 2%	6, 809, 839	14. 3%	4, 696, 768	11. 5%	223. 2%	52. 9%
県全体年計	**27, 384, 171**	**100. 0%**	**18, 378, 417**	**100. 00%**	**48, 140, 975**	**100. 0%**	**47, 646, 767**	**100. 0%**	**40, 821, 535**	**100. 0%**	**149. 0%**	**67. 0%**

４）観光客の満足度

富士吉田市の属する富士・東部圏域では、自然景観や宿のサービス、旅館等のおもてなしの満足度が高いです。文化・歴史は「非常に満足」、「やや満足」を含めると回答者の80%が満足しています。一方、満足度の低いものは公共交通の便、バスとタクシーでのおもてなし等です。

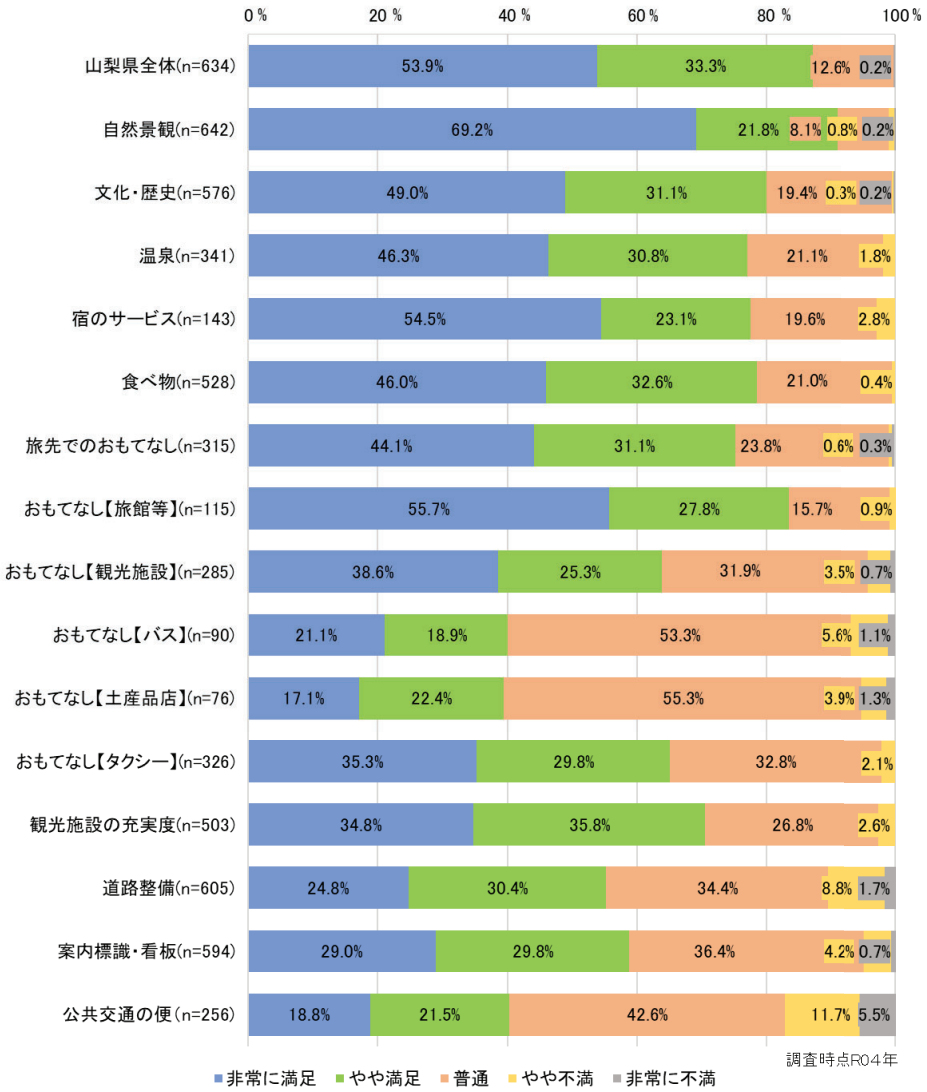


図1・16　富士・東部圏域の観光客満足度（資料：令和4年　山梨県観光入込客統計調査）

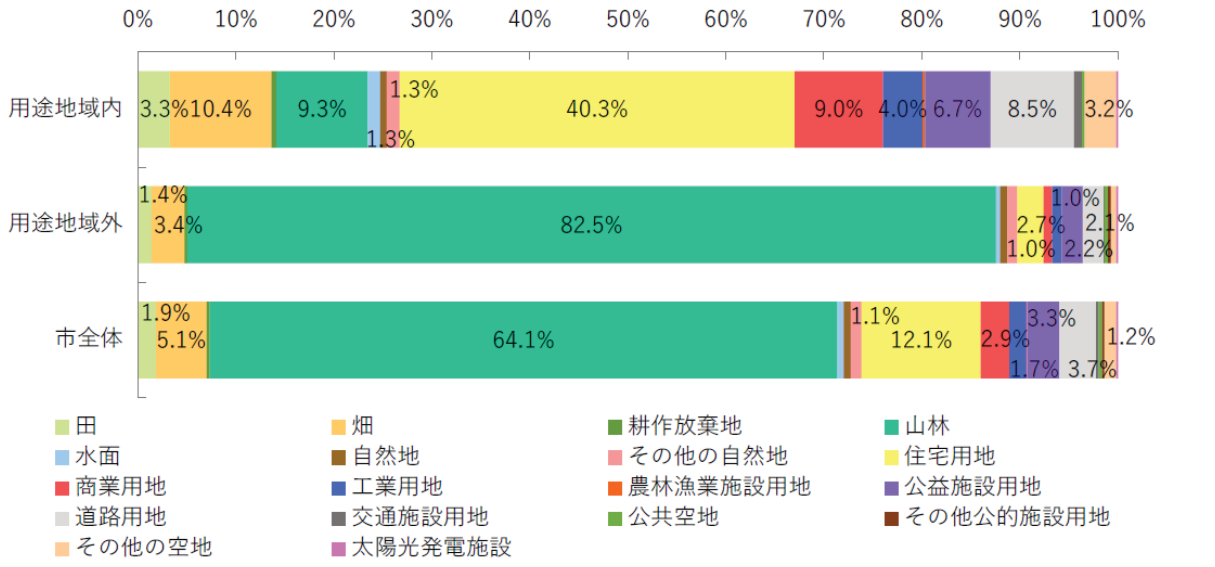
（７）土地利用

１）土地利用の現状

本市の総面積（約122㎢）のうち宅地は12.1％であり、田・畑を加えると19.1％です。残りの80％の面積を山林、原野、その他等が占め、陸上自衛隊北富士演習場もこれに含まれています。

用途地域内では、住宅用地が 40.3％と最も多く、次いで畑の 10.4％、山林の 9.3％の順となっています。田・畑は減少傾向にあり、幹線道路の沿道等を中心に都市的土地利用が進んでいます。宅地面積は緩やかに増加していますが、空き地が散見されています。宅地が５割以上を占めますが、自然的土地利用が 26.7％であり、低密度な土地利用といえます。商業用地は、用途地域内の主要道路の沿道に点在し、特に富士見バイパス（国道 139 号）沿道に大型商業施設が立地しています。用途地域内には本市の地場産業である繊維業の小規模な工業用地が立地しており、一部で住宅用地と工業用地の混在もみられます。

用途地域外では、山林が 82.5％を占め、自然的土地利用は全体の９割の面積を占めています。



資料：令和元年度都市計画基礎調査

図 1･17　用途地域内･外の土地利用構成比（富士吉田市都市計画マスタープラン）

第３節　歴史的背景

（１）先史・古代（縄文時代～平安時代）

本市では富士山の火山活動による影響を受けながら、人々の生活が連綿と続いてきました。大明見の古屋敷（ふるやしき）Ａ・Ｂ遺跡、新倉の池之元遺跡（いけのもといせき）をはじめとした縄文時代の遺跡が山裾に数多く確認されており、縄文時代から人間の営為が認められます。

弥生時代は富士山の火山活動が活発であり、遺跡はほとんど確認されていません。おそらく、人々の活動は盛んではなかったと考えられています。古墳時代は遺跡数が弥生時代と同様に少ないですが、溶岩流に飲み込まれた遺跡から土師器が出土していることから、規模は小さいながらも、人々は確実に富士山麓で生活していたと考えられています。火山活動が終息した平安時代に入ると集落は広範囲に営まれるようになりました。

（２）中世

鎌倉時代に入ると、東海道本道と甲斐国を結ぶ甲斐路は鎌倉往還と称され、多くの人々が往来しました。鎌倉時代後半には富士山登拝が始まり、この頃から北口本宮冨士浅間神社の大鳥居をはじめとする山麓・山中の信仰施設の整備が行われました。

室町時代に入ると郡内領主である小山田氏が本市を支配しました。本市は甲斐国、相模国、駿河国の境界に位置していたことから、北条氏や今川氏が侵攻し、しばしば戦場となりました。

富士山の中腹から噴出し山麓に流れ下った溶岩流の上に吉田の町が誕生したのは、14世紀頃と考えられます。富士山を目指す道者の世話をする御師に加え、商人や職人が集住し、戦国時代には「千間ノ在所」と呼ばれるほど繁栄しました。吉田の町は乙名と呼ばれる有力者たちによって自治的に運営されていました。

現在の上吉田市街地の原形が出来上がったのは、1572（元亀３）年です。東西を掘（神田堀川・間堀川）に挟まれた要害の地に短冊状の地割が整えられました。火祭の主要な要素である神輿の巡行にかかわる記載と、下宮（小室浅間神社）の筒粥神事の記録が当時の古文書に残っています。これらの祭事は約550年の長きにわたり伝承されてきました。

1582（天正10）年に小山田氏と甲斐国守護武田氏が滅亡すると、甲斐国をめぐり徳川家康と北条氏政が激しく争いました。徳川家康が勝利したことで、本市は徳川領になりました。1590（天正18）年の北条氏滅亡後、豊臣秀吉によって徳川家康が関東に移封されると、本市は豊臣領になりました。その後1600（慶長５）年の関ヶ原の戦いまで、豊臣家の家臣である浅野長政の家老、浅野氏重が本市を支配しましたが、関ヶ原の戦い以降、本市は再び徳川領となりました。

（３）近世

江戸時代に入ると、本市は谷村藩に属しました。本市は水利に乏しい溶岩台地であったため、藩主である秋元氏は、河口湖（富士河口湖町）の水を新倉地区に導くため、新倉掘抜の工事を実施しました。1704（宝永元）年に秋元氏が移封になると、本市に谷村代官所が設けられ、天領として治められました。

近世には水掛麦といった地域環境を生かした農業生産や、副業としての絹織物の生産が行われました。近世以降、絹織物の生産は主要産業として発展してきました。また、富士北麓は薬草の産地としても知られ、富士山域に薬草園が設置されました。文化面では、若者で組織された村々の共同体組織を基盤に道祖神祭礼などの年中行事が行われました。夏季の登山期になると、御師家は、江戸を中心とした関東各地から訪れる多くの信仰登山者を受け入れました。

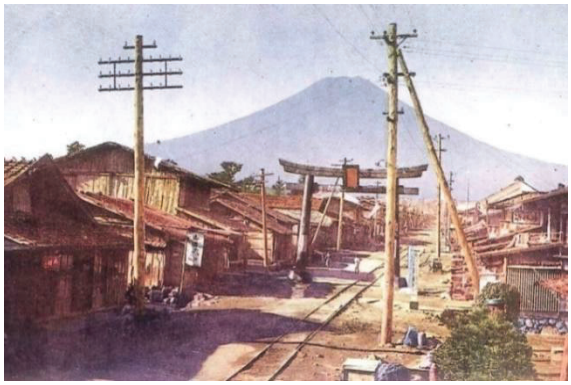
近世後期は、全国的な商品流通経済が展開しましたが、農村荒廃や飢饉の発生、身分制の動揺が起こりました。農業生産力が低く織物産業に依存する郡内地方では、しばしば飢饉が発生しました。

幕末には御師のなかで浪士組や新徴組に参加し幕府側に加わる有志がいました。一方で、1868（明治元）年には上吉田の御師団有志29名が討幕運動に加わり、彼らは蒼龍隊を結成し、同年５月の上野戦争で戦いました。

（４）近現代

近代には村の合併により耕地が整理され農業が発達した一方、水不足による水利権の争いが発生しました。明治末期から大正期には、電力織機の導入により郡内織（ぐんないおり）が産業として発展しました。従来の和装物に加え、洋傘地や服裏地等の洋装物の生産を行いました。1874（明治７）年、下吉田では毎月１・６日に市が開かれるようになり、全国各地の商人を相手に織物の取引が行われました。

明治初期の神仏分離政策により、富士山信仰が神道に改編されました。これに伴い、富士山中の仏像は取り除かれ、仏教色の強かった山頂名は変更されました。1889（明治 22）年に東海道線（御殿場線（ごてんば））の御殿場駅が開設され、1902（明治 35）年に中央線の大月駅（大月市）が開設されました。郡内では 1900（明治 33）年に籠坂から下吉田の都留馬車鉄道が開業し、1903（明治 36）年に富士馬車鉄道が大月まで延線し中央線に接続されました。こうして富士山周辺域への交通網は整備されました。



（出典:絵葉書に見る富士登山）
図1･18　電化された馬車鉄道

大正時代に馬車鉄道が電気軌道に変わり、貨物の輸送時間が大幅に短縮されました。

太平洋戦争時は織物業・観光業が統制され、戦争末期には武蔵航空株式会社が工場疎開しました。1945（昭和 20）年７月 30 日に市内は空襲による被害を受けました。

図1･19　北富士演習場

戦後、1951（昭和 26）年３月 20 日に３町合併により、富士吉田市が誕生しました。市政移行後、富士吉田市は郡内東方の中核都市に位置づけられました。戦時下に統制されていた織物業は一時的に復活しますが、高度経済成長期に織物が慢性不況に陥った影響を受け、次第に衰退しました。また、1964（昭和 39）年の富士山有料道路（富士スバルライン）の開通や 1967（昭和 42）年の新御坂トンネル、1969（昭和 44）年の中央自動車道富士吉田線の開通により、国中地方や首都圏と接続され、本市は観光都市に変貌していきました。

1938（昭和 13）年に富士北麓の旧入会地に設置された陸軍演習場は、戦後に在日米軍演習所として接収されました。1973（昭和 48）年に陸上自衛隊北富士演習場となりました。山の権益を巡る北富士演習場問題は、戦後における山梨県政の課題となりました。

2013（平成25）年６月22日にカンボジアのプノンペンで開催された第37回世界遺産委員会で、富士山は世界文化遺産に登録されました。世界遺産としての正式な登録名は、Fujisan, sacred place and source of artistic inspiration（「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」）です。